

✿センター試験まで あと半年



すべては 君の努力次第

— 自分の未来は 自分自身で書き換える —

センター試験まであと半年。3年生にとっては、「大学受験の天王山」と称される、極めて大事な夏休みがやってきました。夏休みは、基礎・基本の定着のために、じっくり時間をかけることができる“最大のチャンス”です。そして、この時期の成果が、秋以降の成績の伸びを決めるといっても過言ではありません。焦りや不安を感じている人が増えてきているかもしれませんが、まず冷静になって頭の中を整理することから始めましょう。現在の自分の成績や家庭学習の状況等を分析し、自分の課題を明確にすることが大事です。そして、1日1日を大切に、地道に努力を重ねていけば、未来を確実に良い方向に変えることが可能です。高校3年の夏は長い人生の中でも特別な時間です。将来、この夏を振り返った時、「今の自分があるのは、あの夏の頑張りのおかげだ！」と胸を張って言えるような時間にしたいですね。

特集1 3年夏休みにすべきこと

1 基礎・基本の定着が最重要

秋からの問題演習と模試に備え、夏は力を蓄える

9月からの授業や課外等では、より実戦的な問題演習を行っていきます。また、各方式の全国模試を数多く受験して、志望校の可否判定を確認していくことになります。しかし、それらの効果を上げるためには、8月末までに、これまでの学習内容の「基礎・基本」を確実に定着させておくことが必要です。

① 模試・考査を多角的に復習

過去の模試と考査の復習は、最も効果的な学習法の1つです。3年生は、今年だけでもすでに4回の全国模試を受験していますが、まず、それらの問題を解き直しつつ、さまざまな角度から復習してみましょう。模試は、幅広い範囲から出題され、各単元での重要な部分を厳選して作問されていますから、模試の復習は、全科目の単元ごとの重要事項を、効率よく復習するには最適な方法と言えます。

② バランスを重視し総合力を強化

最終的な可否結果は、全科目の合計点で決まるため、「総合力」の強化が重要です。特定の教科・科目や分野に偏ることなく、「教科(科目)間」と「科目内の分野間」のバランスを考えた幅広い学習が必要



2 志望校選択を本格的に



① 『第1志望』は譲らない

現段階で、第1志望の大学を変更する必要はありません。確かに、自分の実力を自覚して、それに合った出願をしていくことは大変重要ですが、安易に第一志望校を変えてしまうことで、今後の勉強へのモチベーションまで失ってしまったのでは大変です。かえって、今の段階では、自分の「第1志望」を大事にし、その思いをエネルギーに変えて勉強する方が、断然効果的です。

② 『出願パターン』を設定

本校では12月の三者面談で出願予定校を決定します。具体的には、国公立大志望者は、センター試験の得点に応じた出願先の組合せのパターン(「前期日程」+「後期・中期日程」(+「独自日程」))を、3つ以上を設定することになります。そのため、あらかじめ、第1志望大以外にも、複数の大学(国公立大+私立大)の学習内容や入試方法を確認し、出願先の候補をリストアップしておく必要があります。そして、9月以降の模試では、それらの大学についての合格判定を確認し、最終的な出願校の絞り込みをしていきます。私立大志望者についても同様で、国公立大よりも多様な入試方法なので確認が必要です。

③ 最新の『2019 募集要項』を確認

3年生が受験するのは、「平成31年度(2019年度)入試」です。今年度も、福島大をはじめ、多くの大学で、学部・学科の改組や入試方法の変更が行われます。他人を頼らず、自分自身で志望する各大学の最新情報を入手しましょう。

④ 『赤本』で到達目標を確認

早期に志望校の「赤本」を見て、過去の出題内容を確認しましょう。具体的な出題形式、難易度、分量を確認し、将来的に自分の到達すべき学力レベルと現在の実力との「差」を正しく認識しておくが目的です。その「差」を埋めることを目指して勉強をしていくのです。また、入試問題は大学からのメッセージ。大学からどんな学力が求められているのかが分かれば、自分の勉強の具体的な目標が明確になるはず。進路室では、保護者からお預かりした進路対策費で、毎年、たくさんの大学の赤本を購入し貸し出しを行っています。気軽に進路室に来て、実際に志望校の赤本を手にとってみましょう。

です。また、夏休みの学習はあくまで英数国を中心にすべきですが、課外等を利用しながら、徐々に「理社」の学習時間を増やし、追い込みを開始しましょう。特に、理系の理科(2科目)と文系の地歴公民については、センター試験だけでなく、国公立の二次試験や私大入試でも重要な勝負科目になってきますから、合格には高い学力が求められます。

特集2 2018年入試の分析結果報告

6月に、全国の高校の実際の入試結果をもとにした大手予備校等による2018年度入試の分析結果が発表されました。以下は、ベネッセ主催の「2018年度入試結果研究会」で報告された分析結果について、集計資料等から引用し要約したものです。

1 全国の傾向

① 『地元志向』&『文系人気回復』ともに継続

福島大では地元占有率が向上 本校も合格者数がさらに増加

近年の全国的傾向である「地元志向」については、2018年も継続しており、**各地の国立大学で、地元高校生の占有率が高くなっています**。一方、東北地区の国立大では、地元の占有率は伸び悩んでいます。

福島大学では、昨年度、福島県出身者は苦戦し地元の占有率はさらに低下させましたが、今年度は合格者数が52名増加し地元占有率も上昇しました。特に、橘高校は大健闘し、昨年度より合格者数がさらに増加しています。しかし、近年、近隣の人文社会系の国立大の入試科目が変更され「英語」が課されるようになってきています。福島大の人文社会系の学類では、英語が必須ではなく、小論文等でも受験できるため、近隣の同系統学部の志望者の流入が見られるようです。さらに、**来年度は、食農学類の設置に伴い、他の学類の定員の削減等の影響が大きくなると思われます。注意が必要です。**

② 国公立大『後期日程の欠席率』が6年連続上昇 **56.9%**!

2018年の国公立大の「後期日程の欠席率」は56.9%と、6連続で前年を上回っています。これは、難易度を下げても、前期日程で合格したいという「安全志向」の出願や、私立大の合格が決まった段階で**早期に進学先を決定する動きが強まったこと**で、高い欠席率になったためと考えられます。ゆえに、**国公立大志望者は、前期日程で不合格となってもあきらめず、後期日程まで受験を続けられれば、合格のチャンスが広がるのです**。むしろ、橘高校は、後期日程での合格者数が増加傾向にあります。

③ 私立大『志願者の増加』と『入学定員の厳格化』の影響が大

2015年に文部科学省から私立大学の入学定員超過率に応じた補助金の減額および不交付措置の基準改正の通知が出されたことを受け、「**入学定員の厳格化**」、すなわち、**以前に比べ、中・大規模大で合格者数を絞り込む動きが見られます**。2018年私立大入試では、合格者の絞り込みを懸念して併願校を増やそうとする受験生の動きと、WEB出願や受験料割引制度の導入など併願を行いやすくする大学の取り組みが重なったことや、理科の科目負担や後期日程削減に伴う募集人員の減少のために国公立大を避ける受験生の増加などにより、**私立大の一般入試の志願者数が増加しています(対前年比1.07)**。一方で、**一般入試の合格者数は減少しました(対前年指数96)**。特に、**一般入試、センター試験利用方式での合格者数の絞り込みの影響が大きかった**と考えられます。2019年度入試まで段階的に厳格化が進むため、引き続き注意が必要です。特に、センター試験利用方式はこれまで以上に合格者が絞り込まれると思われます。

④ 推薦・AO入試の募集定員は拡大傾向

2015年9月に国立大学協会が発表した「国立大学の将来ビジョンに関するアクションプラン」で**推薦・AO入試等の募集人員を30%とする目標が掲げられた**ことを受け、2018年度入試でも、特に国立大において推薦・AO入試の募集人員が増加しました。また、推薦・AO入試でもセンター試験を課したり、一般入試でも面接を課したりするなど、入試区分を問わずに生徒の学力を多面的・総合的に評価する動きが進んでいます。**難関大の東北大でも、AO入試の枠が、来年度もさらに拡大します。**

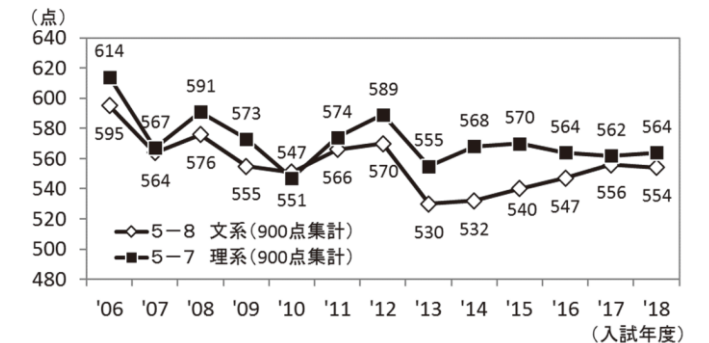


2 『2018年度センター試験』の全体集計結果

5教科総合平均点は文系・理系ともに前年並 高得点者は減

「データネット実行委員会」が推定した5教科900点集計の予想平均点によると、文系が554点(得点率約62%)、理系が564点(得点率約63%)となり、前年と比較して、文系は-2点、理系は+2点となっています。2017年度入試と比べて、**文系、理系ともに大きな変動はみられず、前年並でした**。また科目別の平均点では、英語(リスニング)、国語、生物、生物基礎などで平均点ダウンとなった一方、地理B、日本史B、世界史B、倫理、倫理・政経、化学などで平均点が上昇しました。数学①②に関してもほぼ前年並みでした。理科②では、科目間の平均点差が小さくなってきています。

得点の度数分布をみると、**720点以上の高得点層がわずかに減少**しているものの、全体としては昨年度から大きな変動はありませんでした。



3 学部系統別の志望動向 (志願者数の対前年比較)

大学卒業者の就職状況がかなり好調であるためか、**文系の人気**がかなり高まってきています。特に、国公立、私立ともに、**経済・経営・商学・社会学などの系統**が人気です。私立では人文系や語学系も人気です。一方、理系では、**AI、IoT、ビッグデータ**等の時代の言葉に代表される、社会的要請の高い**情報系に人気が集まる傾向**が見られ、これらの学科が難化しています。

○法学系統

近年の不人気状態から2015年より人気回復傾向が見られ、2018年も引き続き人気が続く。

○経済・経営系統

2016年において国公立、私立ともに人気回復し、2018年でも人気が増加。

○国際関係学系統

社会のグローバル化、大学の国際化の影響で人気上昇。語学を使って何をやるかという考え方によって**高い人気が続いている**。

○教員養成系・教育学系

近年、国立大で非教員養成系の募集を停止し、文理融合学部や理系学部の定員増加の動きが見られる。「**教員養成系統**」だけでみれば、**国公立大の志願者数はやや減少**。

○保健衛生学系統

国公立大の志願者数は前年並み、私立大ではやや増加。看護学系統では、国公立大の志願者数は前年並み、私立大ではやや増加。

○農・水産学系統

国公立大、私立大ともに**減少傾向**。「生命科学」、「食糧生産」、「環境問題」等について学べるが、これらの分野は他のさまざまな分野にも関連しているため、志願者が分散していると思われる。

○理学系統・工学系統

情報科学系統や情報工学系統などの情報系の学科の志願者が増加している。特に、**AI、IoT、ビッグデータ**等に関連する学科系統が人気である。国立大では、理工学系統の学部階層で複数の学科を1学科にしたり、より少ない学科数・コース数に再編して大括りで募集したりする動きが見られるので注意。

